粟耕種基準

（あわ）

1　種子の予措

穂のまま貯蔵した種子は、脱粒して、箕、唐箕で精選する。

2　整地

石灰を全面散布後、12～15㎝の深さに耕起、均平に砕土整地し、平畦畦巾60㎝、深さ７～８㎝に作条する。

適当間隔に排水溝を設ける。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	80	80				
硫　安	1.0	0.4	0.6	0.21		
熔　燐	0.8	0.8			0.16	
塩　加	0.4	0.4				0.24
石　灰	6.0	0.6				

4　播種

（１）　播種期

５月下旬

（２）　播種量

アールあたり0.1～0.2リットル（過乾条件下では0.2リットル）

（３）　播種法

作条内に基肥を施用し、間土をかぶせ軽く鎮圧して底の均平な、播巾12㎝ぐらいの播溝に仕上げる。

種子は播溝に条播し、薄く覆土した後、乾燥のおそれのあるときは鎮圧する。

5　管理

（１）　中耕・除草

草丈４～５㎝のころ第１回中耕、その後２週間をおいて第２回、さらに３週間をおいて第３回の中耕を行う。

除草は、中耕と同時に実施する。

（２）　間引き

第１回、第２回の中耕時に行う。

第２回目で株間２～３㎝、１㎡当たり60～80本に仕上げる。

（３）　追肥

第３回中耕の前に施用する。

（４）　土寄

第３回中耕と同時に実施する。

6　収穫・調製

（１）　収穫

子実が稔実し穂首黄変すれば、上部60㎝を刈り取り結束し、架干しまたは島立乾燥する。株は抜き取るか鋤込む。

（２）　調製

３～４日、束で乾かしたら、脱穀機または連枷（からざお）で脱穀し、唐箕選、篩（ふるい）選を行い、子実水分14%以下に乾かす。

黍耕種基準

（きび）

1　整地

12～15㎝の深さに耕起し、均平に砕土整地した後、平畦畦巾60㎝、深さ７～８㎝に作条する。

作条内に堆肥その他の肥料を施して間土、平鍬で播溝の底を均平に鎮圧して仕上げる。

適当な間隔に排水溝を設ける。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	80	80				
硫　安	1.2	0.4	0.8	0.25		
熔　燐	1.2	1.2			0.24	
塩　加	0.2	0.2				0.12
石　灰	4.0	4.0				

石灰は、土壌酸度PH5～6.5なら施用の必要はない。

3　播種

（1）　播種期

春黍　５月上中旬　　夏黍　７月下旬～８月上旬

（2）　播種量

アール当たり0.1～0.15リットル

（3）　播種法

播種溝内に条播し、浅く覆土する。乾燥のおそれあるときは、鎮圧する。

4　管理

（1）　中耕・除草

播種後２～３週間おきに２～３回行う。

（2）　間引き

第１回は発芽10日後、第２回は第２回中耕のとき行う。

最終的には株間３㎝程度とし、１㎡当たり60本位がよい。

（3）　追肥

出穂前20～25日頃（出芽後40～45日）に追肥を施用する。

（4）　土寄

第１回は、第２回中耕時に軽く培土、第２回の培土は追肥施用後、十分に行う。

5　収穫

茎の黄変が始まったら、穂を刈り取り、小束にして軒下に吊して乾燥させるか、または、シートに広げて乾かし、連枷（からざお）で 脱粒する。

シートに２～３日堆積し醗酵させた後、足踏みや連枷によって脱粒するのもよい。

脱粒後は十分陽干する。

6　調製

篩（ふるい）で異物を除去し、さらに唐箕で精選する。

蕎麦耕種基準

（そば）

1　種子の予措

篩（ふるい）、唐箕で異物、充実不良子実を除去する。

2　整地

石灰を全面散布後12～15㎝の深さに耕起、均平に砕土整地する。平畦畦巾50～60㎝深さ７～８㎝に作条、基肥を施用して間土する。播巾10～12㎝になるよう仕上げる。

適当間隔に排水溝を設ける。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	60	60				
硫　安	1.5	1.5		0.32		
熔　燐	1.0	1.0			0.21	
塩　加	1.0	1.0				0.60
石　灰	6.0	6.0				

4　播種

（1）　播種期

夏蕎麦は４月下旬～５月上旬　　秋蕎麦は８月中旬～下旬

（2）　播種方法

条播…作条内に㎡当たり150粒内外（アール当たり0.4～0.5kg）を播種し、１～２㎝の深さに覆土。軽く鎮圧する。

点播…作条内に株間15～20㎝に10～20粒あて（アール当たり0.4～0.5kg）播種し、条播に準じて覆土する。

5　管理

中耕、除草を適宜行う。

6　収穫・調製

子実の褐色に変じたものが70％位に達したとき、刈り取るか抜き取り、小束に束ねて架干または島立乾燥する。

後熟が十分すすんですべての子実が熟色に達したら、シートに集めて打ち落とすか、脱穀機で脱粒する。

子実は、篩（ふるい）で異物を除いて陽干し、さらに唐箕で精選する。子実水分15％以下になるまで乾かす。

小豆耕種基準

（あずき）

1　選種

篩（ふるい）選、唐箕選、水選により不良種子を除く。

2　整地

堆肥、石灰を全面散布した後、出来る限り深耕する。

均平に砕土した後、平畦畦巾60㎝、深さ５～６㎝に作条する。

基肥は側条施用が好ましいが、播溝に施用する場合は１～２㎝の深さに間土する。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	80	80				
硫　安	0.8	0.8		0.2		
熔　燐	3.0	3.0			0.6	
塩　加	1.0	1.0				0.6
石　灰	8.0	8.0				

4　播種

（1）　播種期

夏型小豆は４月下旬～５月上旬　　秋型小豆は６月中旬～下旬

（2）　播種量

夏型小豆はアール当たり約3000粒、秋型小豆はアール当たり約2000粒（0.3～0.4kg）

（3）　播種法

作条内に夏型小豆は株間15㎝、秋型小豆は株間25㎝、１カ所３粒あて点播し、１～２㎝の深さに覆土する。

5　管理

（1）　間引

第２本葉期までに１株２本に仕立てる。

（2）　中耕・除草

適宜実施する。

（3）　土寄

第１回は第２本葉期に初葉節まで、第２回は第５～６本葉期頃にできるだけ深く培土する。

6　収穫

熟色に達した莢から逐次摘み取り、シートに広げて陽干した後、脱穀機で脱粒する。

総莢数の80%を摘採したら、株は抜き取って島立てし、莢が熟色に達するのを待って脱穀機で脱粒する。

子実は十分乾かし、篩（ふるい)、唐箕で調製する。

大豆耕種基準

（だいず）

1　種子の予措

唐箕、粒選板で異物や不良種子を除去する。

2　整地

堆肥、石灰を全面散布した後できるだけ深く耕起して、均平に砕土整地する。

平畦畦巾50㎝（夏型大豆）～60㎝（中間型、秋型大豆)、深さ５～６㎝に作条する。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	80	80				
硫　安	0.4	0.4		0.1		
熔　燐	3.0	3.0			0.6	
塩　加	1.0	1.0				0.6
石　灰	8.0	8.0				

基肥は側条施用が好ましいが、作条内に施用する場合は１～２㎝の深さに間土する。

4　播種

（1）　播種期

夏型大豆は４月中旬～下旬、中間型大豆は６月上旬～中旬、秋型大豆は６月下旬～７月上旬

（2）　播種量

アール当たり0.5kg

（3）　播種法

作条内に播種。株間は夏型大豆15㎝、中間型大豆20㎝、秋型大豆25㎝。

１カ所３粒あて点播し、１～２㎝の深さに覆土する。

5　管理

（1）　間引

初生葉が展開し始めたら、間引きして１株２本立てに仕上げる。

（2）　中耕・除草

適宜実施する。

（3）　土寄

第１回は第３本葉期に子葉節～初葉節まで培土、第２回は第５～７本葉期にできるだけ深く培土する。

（4）　防除

適宜実施する。

幼莢期から子実肥大期にかけてのカメムシ類の発生には特に留意して防除に努める。

6　収穫・調製

成熟したら抜き取り、圃場で２～３日島立乾燥するか、小束を架干した後脱粒する。子実は陽干後、唐箕、選粒機で精選する。

落花生耕種基準

（らっかせい）

1　整地

石灰を全面散布後、12～15㎝の深さに耕起し砕土する。
平畦畦巾60㎝に可能な限り深く作条し、肥料を施用して間土する。
仕上がりの断面は播溝を底とするＶ字型が好ましい。

2　播種

（1）　播種期

５月上旬～中旬

（2）　播種量

立型種と中間型種はアール当たり0.9～1.0kg、匍匐（ほふく）型種はアール当たり0.6～0.7kgである。

（3）　播種法

播溝内に立型は株間20～30㎝、匍匐型は35～45㎝、中間型は30㎝内外とし、２粒あて点播する。
深さ２㎝程度に覆土する。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	60	60				
硫　安	1.2	1.2		0.25		
熔　燐	2.0	2.0			0.40	
塩　加	1.6	1.6				0.96
石　灰	8.0	8.0				

4　管理

（1）　中耕・除草

７月上旬までの間に適宜実施する。

（2）　土寄

立型、中間型については、開花初め頃に軽く培土する。
匍匐型にあっては中耕による畦間の土壌の膨軟化に努め、培土はしない。

5　収穫・調製

下葉が枯れ始めたら鍬で掘り取り、株の土を振り落として根を上向きにして圃場に広げ陽干するか、５～６株の束を振り分けにして架干する。
茎葉が良く乾いたら、手で子房を摘み取る。
茎莢はさらにシートに広げて陽干する。

胡麻耕種基準

（ごま）

1　種子の予措

風選により不良種子を除く。

2　整地

石灰を全面散布後、深さ12～15cmに耕起し、均平に砕土整地する。

条間60cm、深さ９cm内外に作条し、平畦をつくる。

適当な間隔に排水溝を設ける。

3　播種

（1）　播種期

５月下旬～６月上旬

（2）　播種量

アール当たり0.1～0.2リットル（一般栽培にあっては0.1リットルでよい）

（3）　播種法

播溝に施肥、間土したのち、底面を均平に鎮圧し、株間12～15cmに、５～10粒あて点播し、浅く覆土して鎮圧する。

条播する場合は、篩（ふるい）にかけた細土１リットルに種子をよく混和して播種し、浅く覆土鎮圧する。

4　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	50	50				
硫　安	1.2	1.2		0.25		
熔　燐	1.5	1.5			0.30	
塩　加	0.6	0.6				0.36
石　灰	4.0	4.0				

5　管理

（1）　間引

出芽後７日目に第１回、さらに10日後に所定の株間に１本立とする。

（2）　補植

本葉４～５枚のころ、降雨前の曇天のときを選んで行う。

（3）　中耕

６月下旬～７月中旬にかけて、除草をかねて３回くらい行う。

6　収穫・調製

蒴（さく）開裂始の後３～４日頃に刈り取り、小束に束ね、シートか莫蓙（ござ）の上で島立てして陽干する。

１～２日おきに深い桶の中に手でぶら下げ、棒で叩いて脱粒する。全部脱粒するまで陽干を続ける。

脱粒後は篩、箕、唐箕で異物を除去、精選する。

菜種耕種基準

（なたね）

Ⅰ　移植栽培

《苗床》

1　整地

播種前に深さ10cmに耕起、石灰を散布後、丁寧に砕土し畦巾120cm、長さ適宜の短冊形に畦立てする。

床面に堆肥、その他の基肥を散布し、床土とよく混和する。

最後に床面を丁寧に均平にならす。

2　選種

唐箕選、篩（ふるい）選を行った後、粒選板で精選する。

ことに菌核は確実に除去する。

3　播種期

９月中旬～下旬

4　播種密度

60日育苗の場合　　20cm×20cmの正方形に、１カ所３粒点播

45日　〃　　15cm×15cm　〃　　〃

30日　〃　　10cm×10cm　〃　　〃

本圃１アール当たり苗床面積は、60日苗で約24㎡、45日苗で12㎡、30日苗で約６㎡を必要とする。

5　苗床肥料

10㎡当たり施肥量

肥料名	総量 kg	基肥 kg	追　肥　kg			成分量　g		
			第1回	第2回	第3回	N	P	K
堆　肥	25	25						
硫　安	1.2	0.5	0.2	0.2	0.3	252		
熔　燐	1.1	1.1					220	
塩　加	0.3	0.3						180
石　灰	0.6	0.6						
計						252	220	180

追肥　　発芽後10日目に第１回、以後２週間おきに施用する。

6　管理

（1）　間引

発芽５日目に第１回、以後適宜実施して第３本葉期までに１本立てとする。

（2）　中耕

第１回、第２回の追肥後に直ちに行う。

（3）　防除

適宜実施する。

《本圃》

1　整地

稲跡地に石灰、堆肥を散布し、畦巾1.2～1.5mの高畦をつくる。

畦の上に２条に基肥を施用し、土と混和しておく。

2　定植期

10月中旬～11月下旬

3　栽植密度

一畦２条　　千鳥植え　　株間35cm～45cm　　アール当たり400株

4　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追　肥			成　分　量		
			第1回	第2回	第3回	N	P	K
堆　肥	120	120						
硫　安	6.7	2.3	1.0	1.9	1.5	1.4		
熔　燐	4.0	4.0					0.8	
塩　加	2.0	1.2			0.8			1.2
石　灰	8.0	8.0						
計						1.4	0.8	1.2

追肥　第１回　30日苗、45日苗を植えた時のみ、11月上旬～中旬に施用する。

第２回　寒肥として１月中旬に施用する。

第３回　花肥として３月上旬（開花始）に施用。

5　中耕・除草・土寄

追肥施用の都度実施する。

花肥の後の中耕では十分の土寄せを行う。

6　収穫

最下位の第１次分枝（正常なもの）の、穂先から1/3位の位置に着く莢中の種子が、３～４割褐色をおびたときをその株の成熟期とする。

圃場全体の８割の株が成熟期に到達したら、刈り倒して、そのまま４～６日陽干する。

脱粒前日の午前中に反転する。

7　脱粒・調製

陽干した材料は、シートに集めて、足踏法で脱粒し、風選、篩（ふるい）選、唐箕選をおこなった後、子実水分10%以下になるまで陽干する。

Ⅱ　直播栽培

１　整地

移植栽培の本圃整地に準ずる。

２　選種

移植栽培に同じ。

３　播種期

10月上旬～中旬

４　播種量

アール当たり10～15cc

５　栽植密度

畦巾1.2～1.5mの高畦に２条に播種する。株間35～40cm。アール当たり400株とする。
一株６～７粒点播する。

６　覆土

平鍬でよく砕土し、浅く覆土、鎮圧する。
土壌成分が多目のときは覆土はせずに、足で踏みつけるか、平鍬で軽く叩く程度にとどめる。

７　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追　肥			成　分　量		
			第1回	第2回	第3回	N	P	K
堆　肥	120	120						
硫　安	7.9	2.8	1.7	1.9	1.5	1.7		
熔　燐	6.0	6.0					1.2	
塩　加	2.7	1.1		0.8	0.8			1.6
石　灰	8.0	8.0						
計						1.7	1.2	1.6

追肥　　第１回　播種後40～50日
　　第２回　１月中旬
　　第３回　３月上旬

８　間引

発芽後７～10日頃に２本立とする。（一般栽培では不必要）

９　中耕・除草・収穫・調製

移植栽培に準ずる。

〈付記〉硼素の施用

山口県下では硼素欠乏症の発生するところがある。特に棚田では発生が多い。基本的には堆肥の増施によって解決すべきである。応急対策として硼砂、または硼酸の土壌施用があるが、施用むらや、連用による障害、失敗が少なく、方法も簡単で効果も早い葉面散布法について記す。

1　苗床

苗床10㎡当たり硼酸５g（成分16%）の水溶液（水800～1000cc）を発芽後５日から40日頃にかけて３回散布する。硼砂（成分11%）なら１回につき７gとする。

散布液濃度は成分の1000倍液とし、これよりも濃厚な液を散布してはならない。

欠乏症状が軽い場合は散布回数を減らしてよい。

2　本圃

苗床での葉面散布が実施できなかった場合は、本圃（定植後７日以内）で散布する。直播栽培の場合は11月上旬～中旬に散布する。

アール当たり硼酸50g（硼砂なら75g）を８リットル～10リットルの水に溶かして葉面散布する。これよりも濃厚な液を散布してはならない。

なお散布時期が遅れると効果が劣る。

薄荷耕種基準（根植法）

（はっか）

1　種根

12月中旬の植え付け直前に細爪の備中鍬で堀取り、褐変した古い地下茎を除き、先端に新芽を有する地下茎のみを採集して種根とする。

掘り取った種根は、５～６㎝の長さに切断してなるべく早く植え付ける。

アール当たり種根量は７～８kgを必要とする。

2　整地

前作作物収穫後石灰を全面散布し、深さ12～15㎝に耕起、砕土して均平にならす。

高畦の場合は、畦巾1.2㎡とし、深さ５～６㎝の作条を２条設ける。

平畦の場合は、畦巾60㎝とし、深さ５～６㎝に作条する。

3　植え付け

時期　　12月中旬

方法　　同じ長さに切り揃えてある種根を、作条内に厚薄なく配列し、２～３㎝の厚さに覆土して、鎮圧する。

4　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	a当総量	基肥	追　　肥				
			第１回	第２回	第３回	第４回	第５回
堆　肥	150	150	75	75			
硫　安	7.0		0.8	2.4	0.8	2.0	1.0
過　石	4.0		0.7	1.6		1.4	0.3
塩　加	2.5		0.4	1.5		0.5	0.1
石　灰	12.0	12.0					

基肥は、耕起の際、堆肥と石灰のみ施用する。

追肥は、第１回を発芽後の４月下旬、第２回は１番刈り後の６月上旬、第３回は７月中旬、第４回は２番刈り直後の８月下旬、第５回は９月中旬に側条施用または畦間に施用する。茎葉にかかった肥料はただちに藁箒ではらい落とす。

液肥施用が好ましい。

5　管理

（1）　中耕

３月下旬と第１回追肥の際（地下茎が畦間地下全面に広がる前）に畦間を浅く耕す。

（2）　除草

刈り取り直後に行うほか、茎葉を損傷せぬよう、早めに適宜実施する。

（3）　補植・間引き

苗立ちは、30㎝間に４～５本が適当で、５月中旬頃の降雨後に、間引きと補植を行う。（補植用苗は圃場の隅で予め準備しておく。）

（4）　匍匐（ほふく）茎摘除

１番刈り、２番刈り後には匍匐茎や、刈り残し茎葉の摘み取りを行う。

（5）　病害虫防除

適宜実施する。

6　収穫

（１）　時期　　１番刈り…６月５～10日頃（開花前）
　　２番刈り…８月15日頃（開花中）
　　３番刈り…10月20日頃（降霜前）

（２）　方法　　晴天を見計らって、朝露が乾いた後刈り始める。
　　１番刈りは地際から1.5㎝（２～３節をのこす）で刈り取る。
　　２番刈りは地上３㎝で刈り取る。
　　３番刈りは地際から刈り取る。

7　乾燥

　刈り取った茎葉は、稲藁で直径約10㎝の小束に束ね、風通しの良い室内に、予め設けた乾竿に割懸けにし陰干しする。収穫物が大量の場合は屋外で、筵干し（むしろぼし）するかまたは雨除けをつけて架干する。

　乾燥程度は、生草の25%に達したころを適当とする。

8　取卸（とりおろし）・蒸留

　乾燥を終わった茎葉は、蒸留器に十分詰め込んで蒸留する。蛇管の冷却水温は、28℃以下となるようたえず交換する。90分間は蒸留する。

　蛇管からの滴下水をスプーンに受けてみて、浮遊する油滴が５～６滴以下になっておれば蒸留を終わる。

　なお、乾燥茎葉の貯蔵は、半年以上にわたらないようにする。

　蒸留によって得た取卸油は、壜に密封貯蔵しておき、氷結法により脳分検査をする。

除虫菊耕種基準

（じょちゅうぎく）

Ⅰ　春植え栽培

《苗床》

1　整地

９月中下旬、堆肥を全面散布した後、畑地を深さ10㎝に耕起し、丁寧に土塊をくだき、巾120㎝、高さ５～６㎝の揚床をつくる。床面は板の類で均平にする。

2　播種床の消毒

播種10日前に臭化メチルを30㎝間隔、深さ15㎝程度にあけた穴の中に一穴２～３cc ずつ注入し、直ちに足で穴をふさぎ、ポリフィルムで必ず被覆する。

４～５日経過後、被覆物を除去し、２～３回耕耘してガスを発散させる。

3　播種

（1）　種子の予措

唐箕選、水選

（2）　播種期

10月上旬

（3）　播種量

苗床㎡当たり55～60cc（本圃10a当たり350～400cc）

（4）　苗床面積

10a当たり6.5～７㎡

（5）　播種法

播種前に床面に十分潅水する。

床面全面に播種して軽く鎮圧し、種子がかくれる程度に、細土で薄く覆土する。

4　肥料

（1）　完熟堆肥…㎡当たり1.2kg内外

堆肥は前もってよく砕き、５分目の篩にかけて、土壌消毒前に全面散布し、床土に混和する。

（2）　菜種粕…３㎡当たり60g内外（または硫安㎡当たり12g）

菜種粕は予め十分腐熟させておく。硫安は液肥とする。

２月上中旬の頃施用する。

5　管理

（1）　日除け

播種後は苗床の乾燥を防止するため、麦稈で５～６㎝の厚さに被覆する。

発芽初めに至ったら徐々に麦稈を除去し、20%の発芽をみるころには50%を取り除くようにする。更に３～４日おき２回に分けて全部を除去する。

発芽が早く進んでいる部分は、早めに日除けを薄くする。また日除けの除去時刻は晴天の日中を避ける。

（2）　間引き

発芽後12月頃までの間に２～３回行う。最終的には３㎝四角に１本の割合が良い。

（3）　その他

潅水は、発芽までに床面が白乾状態にならぬよう適宜実施する。発芽開始後は潅水の要はない。

除草、病害虫防除を適宜実施する。

《本圃》

1　整地

３月下旬、深さ12～13cmに耕起、砕土して、条間55cm（平畦畦巾55cm）に作条する。

麦の間作とする場合は、予め麦の畦巾を55cmとしておき、特別の整地はしない。

2　肥料

（1）　施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥(10月中旬)	追　肥		成　分　量		
			12月中旬	２月下旬	N	P	K
堆　肥	80	80					
硫　安	3.2	0.8	1.5	0.9	0.7		
過　石	3.5	2.0		1.5		0.7	
塩　加	1.7	0.1	0.8	0.8			1.0

（注）硫安は哨安にかえてもよい。

（2）　施用法

基肥、追肥とも、株際より15cm内外はなして、浅い施肥溝を作り、これに所定量を施用して覆土する。

3　移植

（1）　移植期

３月下旬～４月上旬

（2）　栽植密度

平畦畦巾55cm　　株間24cm　　１株１本植え　　㎡当たり栽植本数7.6本

（3）　移植方法

降雨後の土壌が湿っている時、あるいは予め苗床、本圃に十分潅水した後、発育良好で斉一な苗を掘り取り、茎葉を損傷せぬよう丁寧に浅く植える。

4　管理

中耕、除草、防除を適宜実施する。但し中耕は特別な耕起は行わず、除草をかねて行うにとどめる。

5　収穫調製

大多数の花の管状花80%が開花したころを見計らって株ごとに抜き取り、直ちに麦扱ぎ千歯で花部を扱ぎ落とす。

花部は数日間筵（むしろ）干しにして水分13%以下に乾燥したものを貯蔵する。

茎葉はそのまま地干しして十分乾燥したものを収納する。

Ⅱ　秋植え栽培

《苗床》

春植え栽培に準ずる。

《仮植床》

１　耕起・整地

２月下旬、完熟堆肥を散布した後、深さ10㎝に耕起する。

仮植期に、巾120㎝、高さ５～６㎝、長さ適宜（本圃１アール当たり13㎡）の高畦様式の床を作り、床面を均平にする。

２　仮植

（１）　苗の選別

健全、良好に発育して、形質の酷似した苗を選ぶ。

（２）　仮植時期

３月下旬～４月上旬

（３）　仮植の密度

12㎝×12㎝（㎡当たり69本）

（４）　植え付け方法

仮植前日、苗床に十分潅水しておく。

仮植当日、苗を丁寧に掘り取り、発育良好な健全苗を選んで、なるべく浅く仮植し、十分潅水する。

３　肥料

（１）　基肥

苗床耕起前に、㎡当たり1.2kgの完熟堆肥を施用するほかは施用しない。

（２）　追肥

８月中旬～９月上旬頃、硫安㎡当たり40gを液肥として施用する。

４　管理

潅水、除草、防除を適宜実施する。

《本圃》

１　耕起・整地

10月上旬、深さ12㎝に耕起、砕土する。条間55㎝、深さ10㎝の施肥溝を切り、基肥を施用する。

次いで、施肥溝条間中央に植溝を切りながら肥料に覆土する。

２　肥料

春植え栽培に準ずる。

３　移植

10月中旬、前述の植溝に株間21㎝、１株に１本ずつ（㎡当たり8.7本）植え付ける。

移植方法は春植え栽培に準ずる。

Ⅲ　株分け栽培（この方法は品種保存に便利である。）

１　親株育成

採花後の刈株を親株とする。

６月、収穫は抜き取りによらず、鎌で花茎を刈り取る。刈株はそのまま畑に置き、８月下旬に薄い液肥を施して新芽の発育を促す。

２　肥料

８月下旬、硫安アール当たり1.2kgを液肥として施用するほかは、春植え栽培に準ずる。

３　株分け及び植え付け

10月中旬、親株を丁寧に掘り起こし、枯れ茎、枯れ葉を除去して新芽の生育旺盛な分岐茎５～６本を１株として分割、本圃に定植する。

その他の事項は春植え栽培に準ずる。

蒟蒻耕種基準

（こんにゃく）

1　採種耕種法

収穫玉に生ずる子芋（生子）をそのまま圃場に２～３年残しておき肥大したものを種球とするか、生子を別圃場に植え替えて種球を養成する。

種球は、損傷の無いもの－特に芽が健全なもの－を選ぶ。

2　種球の貯蔵

冬期間５℃前後の場所で、10～12℃以上、２℃以下にならぬ、空気の流通の良いところを選ぶ。

種球は収穫後４～５日陰干し、かるく土を落として、発育年次別に竹簀の子（たけすのこ）の上に別けておく。

２℃以下になるときは、筵（むしろ）で周囲と上を囲う。

3　整地

11月頃、深耕して堆肥を耕込み、翌春植え付け前に砕土した後、再び15～20㎝の深さに耕耘して、均平にする。

麦の間作とする場合は、麦の畦巾を75～120㎝とし、植え付けの約30日前（３月中旬～下旬）に中耕して土を膨軟にしておく。植え付け時に再度耕して植え溝を切る。

4　植付

（1）　時期

４月中旬～５月上旬

（2）　栽植密度

発育年次（１個重g）	畦　巾 ㎝	株　間 ㎝	㎡当個数	㎡当重量 g	備　考
生　子　(15)	120	20	17	250	２条千鳥植
	150	15	18	270	〃
２年球　(40)	150	30	9	360	２条千鳥植
(60)	150	35	8	480	〃
(80)	75	25	5	400	１条植
(120)	75	35	4	480	〃
３年球　(200)	75	35	4	800	１条植
(250)	75	45	3	750	〃
４年球　(400)	75	65	2	800	１条植

5　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	全量	基肥	追　肥			成　分　量		
			6月下旬	7月中旬	8月中旬	N	P	K
堆　肥	120	120						
硫　安	2.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5		
過　石	2.8	2.8					0.6	
塩　加	1.9	0.4	0.4	0.5	0.6			1.1

（注）アール当たり植え付け量80kgの場合の施肥基準であるから、堆肥以外は植付種球量により多少加減する。

6　管理

（1）　中耕

発芽期に行う。

畦間を中耕して土寄せする。

発芽前や発芽期を過ぎぬよう留意する。

土寄せの深さは小球で３㎝、大球で６㎝。

（2）　敷草

中耕後に行う。

落ち葉、麦稈などアール当たり80kg程度を敷き込む。

7　収穫

10月上中旬頃、成熟期（葉色黄変し、倒伏する）に達するので、10月下旬～11月上旬に掘り取る。掘り取りの際に芋を傷つけぬよう注意する。

8　栽培上の留意点

蒟蒻は、強日射、高地温、土壌乾燥をきらう。日射量70%内外、地温30℃以下で旱ばつの恐れのない場所を選ぶ。

柿、桐など樹園地がよく使われ、種球の生育年次にあわせて、大豆、胡麻、玉蜀黍などを間作作物として取り入れるとよい。

黄蜀葵耕種基準

（とろろあおい）

1　種子の予措

唐箕選によって夾雑物、不良種子を除去する。

2　整地

深さ12㎝に耕起し、土塊を砕いて均平にならした後、畦巾45㎝巾12㎝の播溝を作る。

3　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	150	150				
硫　安	2.0	1.0	1.0	0.42		
過　石	2.0	2.0			0.4	
塩　加	0.7	0.7				0.42
石　灰	8.0	8.0				

（１）　施肥法

基肥は作条内に施用し、間土を置いて鍬底で鎮圧する。追肥は側条施用とする。

（２）　施肥期

基肥は６月中旬　追肥は９月上旬

4　播種

（１）　播種期

６月中旬

（２）　栽植密度

点播…株間10㎝　１カ所５粒播

条播…アール当たり0.4リットル播

5　管理

（１）　間引き

本葉が展開した頃第１回の間引きを行い、その後７日間隔に２回間引きする。最終的には株間10㎝の１本立てとする。

（２）　摘芯

最後の間引き時に株元の芽を掻き取る。

開花が始まるころ、本葉４～５枚を残して摘芯する。草丈50～60㎝未満の矮性品種にあっては摘芯の必要はない。摘芯後発生する脇芽は掻き取る。

（３）　摘蕾

蕾が現れたら摘除する。

（４）　中耕・除草・培土

適宜行う。摘芯時に培土する。

6　収穫・調整

11月下旬、備中鍬で掘とって泥をよく落とし、子葉節から上を切り捨てる。

（青茎が1.5㎝以上残らぬよう注意する）

切り口直径が1.5㎝以上のものと、それ以下のものは分別して出荷する。

棉耕種基準

（わた）

1　整地

堆肥、石灰を全面散布の後、12～15㎝の深さに耕起、砕土し、均平にならす。

条間60㎝、深さ５～６㎝に作条し、基肥を施用して、播き条が条間とほぼ同じ高さになるよう間土を置く。

播種床は鍬底で軽く鎮圧しながら均平に仕上げる。４～５m間隔に排水溝を設ける。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	150	150				
硫　安	6.5	2.6	3.0	1.4		
過　石	5.0	5.0			1.0	
塩　加	2.5	2.5				1.5
石　灰	8.0	8.0				

追肥は７月上旬と７月下旬の２回に均等分施する。

3　播種

（1）　種子予措

精選種子アール当たり0.6～0.8kgを７～10時間冷水に浸漬後、55～60℃の温湯に10分間浸して冷水で冷やし、軽く水を切って篩（ふるい）にかけた草木灰２～３カップを加え、よく揉んで塗抹する。

（2）　播種期

５月上旬

（3）　栽植密度

点播は株間15～18㎝、１株６粒播、後間引いて２本立条播は１m間40～50粒播、後点播と同密度に間引き。

（4）　覆土

深さ２㎝位に覆土し、土壌が乾燥しているときは鎮圧する。播き条が条間よりやや高くなるように仕上げる。

4　管理

（1）　間引き

第１本葉期に第１回、第３本葉期には完了（品種試験は株間15㎝１本立がよい）

（2）　中耕・除草

子葉展開後に第１回、以後適宜実施

（3）　培土

間引き完了後から第５本葉期の間になるべく深く土寄せする。

（4）　潅水

着蕾期から蒴（さく）肥大期にかけては、土壌過乾に陥らぬよう留意する。

（5）　摘芯

主茎長が75㎝を超えるときは摘芯摘梢して無効着花を防ぐ。

（6）　病害虫防除

間引き時にモザイク状病害その他病害の罹病個体は、必ず除去する。特にメクラカメムシには留意する。

５　収穫

開絮（かいじょ＝蒴の裂開）が始まったら適宜綿を摘み取る。

摘採した実綿（みわた）は、目の粗い簀の子（すのこ）の上に広げて陽干をかねてワタアカミムシを追い出す。２～３日陽干したら貯蔵する。

80～90%の蒴が開絮して実綿の摘採が終わったら、茎を抜き取って日当たりが良くて雨露のかからぬ場所に立てかけておき、未熟蒴の開絮をまって木採綿を収穫する。

摘採綿と木採綿は区別して綿繰機にかけ繰り綿（くりわた）をとる。

苧麻耕種基準
（吸枝耕種法）　　（ちょま、ラミー）

1　整地

３月上旬（または７月上旬）石灰を散布し、深さ約15㎝に耕起して均平に砕土整地する。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	寒肥（基肥）	１番追肥	２番追肥	３番追肥	成分量		
						N	P	K
堆　肥	75.0	75.0						
大豆粕	7.5	7.5				0.49	0.13	0.15
硫　安	15.5		5.5	5.5	4.5	3.26		
過　石	3.8	3.8					0.76	
塩　加	1.5	1.5						0.90
石　灰	7.5	7.5						

（注）１．この施肥基準は植え付け初年目２番刈り終了後に適用する。
２．植え付け初年目は寒肥を（　）内の基肥に読み替える。
３．植え付け初年目の追肥は硫安総量11.0kgとし、１番追肥と２番追肥に２等分して施用。

3　施肥方法

（1）　初年目

基肥　石灰は耕起前に施用する。堆肥、大豆粕、過石、塩加は植え溝に施用し、３㎝くらい間土する。

追肥　１番追肥は５月上旬、苧麻が20㎝位に伸長したときに施用。２番追肥は１番刈り直後に施用。

（2）　２年目以降

寒肥　12月上中旬に施用する。

追肥　１番追肥は３月中旬、２番追肥は１番刈り直後、３番追肥は２番刈り直後に施用する。石灰は早春に全面散布する。

4　植え付け

（1）　植え付け時期

３月上旬～下旬（または６月下旬～７月中旬）

（2）　苗ごしらえ

充実した吸枝を用いる。長さ12㎝くらいに切断し、根元の側（親株に近い側）を揃えて束ね、消石灰で切り口に根元側を示す標識をつける。

（3）　栽植密度

畦巾60㎝　株間20～25㎝　アール当たり700～800本

（4）　植え付け方法

植え溝内に、吸枝の根元（消石灰で印を付けた側）を下にして、植え溝壁に立てかけるように斜めに植え付け、苗の先端が僅かに地面にのぞく程度に覆土する。

５　管理

（１）　中耕

植え付け初年目のみ５月中旬に実施する。

（２）　除草

適宜行う。

（３）　補植

植え付け年度は、植え付け後20～30日で枯損株の補植を行う。晩植の場合でも、遅くとも立秋までに完了し、活着を助けるため十分潅水する。

（４）　防除

フクラスズメの発生に対しては早期発見に努め、早目に防除する。白紋羽病に対しては、発生株を中心に半径１ｍの円形に遮断溝を掘り、土壌消毒を行う。

６　収穫・剥皮・調整

（１）　収穫期

植え付け初年日	１番刈り…７月下旬～８月上旬
	２番刈り…10月下旬
２年目以降	１番刈り…６月下旬～７月上旬
	２番刈り…８月中下旬
	３番刈り…10月下旬～11月上旬

（２）　刈り取り方法

やや厚手の鎌で地際より刈り取り、大束に束ねて剥皮機に運ぶ。

（３）　剥皮・調整

収穫した茎は、速やかに苧麻剥皮機で剥皮する。剥皮した繊維は竹竿に掛け広げ１㎥当たり6gの硫黄で燻蒸した後、水分13%以下に陽干する。 但し試験材料は燻蒸しない）

黄麻耕種基準

（こうま、つなそ）

1　整地

5月上旬、石灰を散布した後、深さ15㎝に耕起、砕土、均平にして、平畦畦巾45㎝、深さ5～6㎝に作畦する。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	100	100				
硫　安	12.0	5.0	7.0	2.5		
過　石	4.0	4.0			0.8	
塩　加	2.0	2.0				1.2
石　灰	8.0	8.0				

基肥は作条内に施用、地面が平らになるまで間土して、軽く鎮圧し、浅い播種溝に仕上げる。

追肥は、第２回間引き後に側条施用する。

3　播種

（１）　選種

篩（ふるい）選、唐箕選を行って不純物、不良種子を除去する。（ａ当たり１デシリットルを準備、粗選種子であれば1.5デシリットルが必要）

（２）　播種期

５月下旬

（３）　栽植密度

畦巾45㎝　株間９㎝

（４）　播種方法

９㎝千鳥の３粒点播とし、薄く覆土する。

粗選種子を用いた条播の場合は、アール当たり1.5デシリットルの種子を、少し湿らせた川砂または土で増量して均一にまく。

4　管理

（１）　中耕・除草・培土

発芽後５～６㎝に生育したとき実施する。

（２）　間引き

第１回　５㎝位に生育したとき

第２回　15㎝位に生育したとき

（３）　防除

適宜行う

5　収穫

（１）　刈り取り

開花始を10～15日過ぎて蒴が着生し始めて茎にワックスがでた頃（９月上旬～中旬）収穫する。開花が甚だしく遅いものは適宜行う。

長さ１～1.5mの肉厚の竹刀（たけがたな）を跳ねあげるようにして葉を払い落とし、手で抜き取る。５～６本を握って一気に抜き取った後、少し短い竹刀で葉を払い落としてもよい。

（２）　剥皮

収穫後速やかに行う。苧麻剥皮機を使用するのがよいが、これが無い場合は、手剥ぎする。

先ず、根本から30㎝のところを強く折り曲げて指先で少し皮を剥ぐ。

次に木部と皮の間に指または竹ベラをはさんで皮を剥いでから根部を切り落とす。２人の組作業にすると能率が上がる。

剥ぎ取った靭皮は、４日くらい陽干して粗皮（あらかわ・粗麻）に仕上げ、500ｇ内外の小束にして貯蔵、出荷する。

（３）　製繊

葉を払い落とした茎、または粗皮を流水か停滞水に浸漬し、15～20日後に不純物を洗い流す。

ぼう麻耕種基準

（ぼうま、いちび）

1　整地

4月下旬、石灰と堆肥を散布後、深さ15㎝に耕起、砕土、均平にする。化学肥料の基肥を全面に施用し、土壌とよく混和した後、平畦畦巾30～45㎝、深さ5㎝に作条する。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	100	100				
硫　安	6.0	2.0	4.0	1.3		
過　石	4.0	4.0			0.8	
塩　加	2.0	2.0				1.2
石　灰	8.0	8.0				

3　播種

（１）　選種

篩（ふるい）選、唐箕選により不純物、不良種子を除去する。

（２）　播種方法

条播はアール当たり850ｇ、点播（株間５㎝　一株５粒）はアール当たり500ｇを作条内に下種し、１～２㎝の厚さに覆土する。

土壌が乾燥しているときは軽く鎮圧する。

4　管理

（１）　間引き

第１回は茎長５㎝に達したときに実施する。第２回は15㎝に達したとき、株間５㎝の１本立てに仕上げる。

（２）　追肥

第２回間引き直前の、晴天の午後を選び施用する。

5　収穫

最初の蒴（さく）の中の種子が乳熟期に達したとき（茎の外皮が剥離しやすくなる７月下旬～８月上旬）、根元から刈り取り、梢部を切り離して直径10～20㎝にゆるく束ねる。

これを水温が上がりやすい浅い池などに浸漬する。

７～10日を経た後、清水中で繊維を洗いだして、懸垂陽干する。

洋麻耕種基準

（ようま、ケナフ）

1　整地

４月中旬、石灰を散布し、深さ15㎝に耕起、砕土して平畦畦巾50㎝、深さ５～６㎝に作条する。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	100	100				
硫　安	12.0	5.0	7.0	2.5		
過　石	4.0	4.0			0.8	
塩　加	2.0	2.0				1.2
石　灰	8.0	8.0				

基肥は作条内に施用し、間土する。

追肥は第２回間引きの後施用する。

3　播種

（1）　播種期

５月上旬

（2）　栽植密度

畦巾50㎝　株間５㎝

（3）　播種方法

５㎝千鳥の３粒点播、薄く覆土する。

条播の場合は、播種量アール当たり５～６デシリットル。

4　管理

（1）　中耕・除草・培土

発芽後５㎝位のときと、15㎝位のときに実施。

（2）　間引き

中耕、除草、培土の都度実施する。

第２回間引きで１本立てとする。

条播した場合も、２回目の間引きで株間５㎝千鳥の１本立てに仕上げる。

（3）　防除

適宜実施する。

5　収穫

全株の30％が開花始めに達したとき、１～1.5mの竹刀（たけがたな）で葉を払い落とした後、地際から刈り取る。

刈り取った茎は、直径20㎝内外で上下２カ所を括った束にして 運搬する。（時期８月下旬～９月上旬）

6　製繊

結束した束は、直ちに流水または停滞水に浸漬する。

15～20日経過したら、水中で繊維のみを切り離し、不純物を洗い流す。

繊維は竹竿にかけて陽干した後、小束にして貯蔵、出荷する。

ニュージーランド麻耕種基準

（ニュージーランドあさ、まおらん）

1　整地

３月上旬または10月上旬、石灰を散布し耕起、砕土する。

90cm間隔に施肥溝を深く掘り、堆肥その他有機物を施用し、この施肥溝を中心に高さ５～６cmの畦を作る。

2　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥（寒肥）	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	120	120				
硫　安	14.7		14.7	3.09		
過　石	4.6	4.6			0.92	
塩　加	2.3	2.3				1.38
石　灰	8.0	8.0				

（1）　施肥方法

初年目は、植え付け後30日を経過した頃、堆肥及び石灰以外の基肥を施用する。

植え付け２年目以降は、12月上旬、株際両側に施肥溝を切り、寒肥を施用して覆土する。但し、石灰は早春に全面散布する。

追肥は、３月上旬と９月上旬の２回に等分して施用する。

3　植え付け

（1）　植え付け時期

３月中旬または10月中旬

（2）　栽植密度

畦巾90cm　株間60cm　アール当たり185株

（3）　苗調製

植え付け後３年以上を経た親株を掘り起こし、根元より40cmのところから上を剪除して、蘖子（けっし）を単位に株分けする。その際、春植えの時には新根の発生したものを選び、秋植えの時には古根を除去する。

（4）　植付方法

苗の扇状面を南に向けて根冠部より10cmの深さに植える。

（実験上の注意点…実験用の苗は、葉数のみでなく１本当たり重量にも留意して揃えること）

4　管理

植え付け後は施肥するごとに中耕を行うが、初年目は植え付け後60日を経過したころ培土する。

２年目以後は肩落としをしてから寒肥を施用し、その後培土溝上げを行う。

４月中旬　までには、枯損株の補植を行い、梅雨明けには敷き草を施す。

除草は適宜実施する。

5　収穫

植え付け３年目から収穫を開始。３月と９月の２回行う。

収穫に当たっては、心葉３枚を残し、熟葉のみを小刀で刈り取る。

6　採繊

収穫した葉は採繊機で繊維を分離するか、または30分間熱湯で煮沸した後、浸水発酵の方法で繊維を採る。

繊維は十分乾燥し、直径10cm内外の小束に束ねて、鼠害の無い冷暗所に貯蔵する。

七島藺耕種基準

（しちとうい）

Ⅰ　苗床の部

1　整地

日当たり良好で潅水に便利な畑地を選び、４月中旬耕起砕土した後、巾1.5mに浅い溝（踏切でよい）をつけた短冊型の平畦苗床を作る。

本圃アール当たり苗床必要面積は20㎡である。

2　苗の準備

前年苗を掘り起こし、土を落として２年越の古地下茎を除去、鋏で地上茎２～３本を１株の単位に株分けする。

地上茎は株際から約20㎝で剪除して苗を仕上げる。苗は新根の発生を促すため、地下茎部を１昼夜水に浸す。

3　植え付け

（1）　植付期

４月20日頃

（2）　植付密度

15㎝正方形植え（㎡当たり44株）

（3）　植付方法

新芽の着生の多い方を東南面に向け、地下茎を水平に、地上茎を直立させ、深さ３㎝に植え付ける。

4　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥		成　分　量		
			5月中旬	3月下旬	N	P	K
堆　肥	120	120					
硫　安	10.0	5.0	2.0	3.0	2.1		
過　石	8.0	8.0				1.6	
塩　加	2.0	2.0					1.2

（1）　施肥法

基肥は、苗床整地の際全面施用し、耕土と混和する。

追肥は、朝露が消えた後全面に施用する。

5　管理

（1）　除草

植え付け後、適宜実施する。

（2）　潅水

夏季過乾条件が持続するときは、潅水する。

（3）　病害虫防除

適宜実施する。

（4）　梢切り（うらぎり）

移植後60日を経たころ、地上茎の倒伏防止と地下茎充実のために、120㎝の高さに茎の先端を刈り取る。

（5）　防寒

12月下旬地上茎を地際から刈り払い、さらに藁稈類を４～５㎝の厚さに散布する。

（6）　苗床焼き

翌年３月中旬、斉一な萌芽を助けるとともに、雑草と病害虫防除のため、防寒用に散布してある地上茎や、藁稈類に圃場の周囲から火を放って焼却する。

Ⅱ　本圃

１　整地

４月中旬、堆肥・珪酸苦土石灰を全面施用後、15cm以上の深さに耕耘し均平にする。潅水して荒代掻きの後、基肥を全面に均一に散布し、丁寧に植代掻きを行う。

２　苗準備

苗床から掘りとった苗株は、２年越しの古地下茎を除去、15cm以上に伸びた地上茎３本を単位に株分けする。地上部は20cmに切り揃えて50株ずつ結束、地下茎部を一昼夜浸水する。

３　定植

（１）　定植期

４月下旬～５月上旬

（２）　栽植密度

12cm平方植え（ａ当たり6944株）とし、３m間隔に巾30cm程度の管理用通路をあける。

（３）　植付方法

地下茎は水平に、地上茎は直立させ、新芽着生の多い方を東南に向けて３cmの深さに植える。

４　肥料

施肥量（ｋｇ／ａ）

肥料名	総量	基肥	追肥	成　分　量		
				N	P	K
堆　肥	190	190	―――			
油　粕	7.5	7.5	―――			
硫　安	7.5	7.5	―――	1.6		
熔　燐	6.0	6.0	―――		1.2	
塩　加	2.0	2.0	―――			1.2
珪カル	15.0	15.0	―――			

（１）　施肥法

堆肥、油粕、珪カルは耕起時に全面施用、その他の化学肥料は植代掻き前に施用する。

５　管理

（１）　潅水

植え付け後７日間は活着促進のため深水とし、以後30日間は足跡に水たまりがある程度の浅水にして分蘖（ぶんげつ）を促す。その後の25日間を２cm前後に湛水したら落水して収穫まで茎の充実をはかる。

（２）　病害虫防除

特にベッコウ病、アブラムシ、メイチュウに留意する。

（３）　梢切り

植え付け後70日頃、茎長135cmを超えたら先端を130cmに切り揃える。以後135cmを基準に１～２回切り揃える。

６　収穫

（１）　適期

茎の３分の２以下が光沢のある黄色を帯びたときが適期。

（２）　方法

晴天の日を見定め早朝に地際から刈り取り、下から１m位のところを握って屑藺を振り落とす。

（３）　分割

収穫したものは当日中に分割機で２つに割る。泥染めする場合には分割前に行う。

（４）　乾燥

翌朝乾燥場に薄く広げ、午後４時頃に保護葉を落とす。次の日もこれを繰り返して乾燥をはかる。

（５）　貯蔵

乾いた茎は、1.5kg位を一束に束ね、これの約10束を大束に結束して、光線の当たらぬ乾燥した場所に貯蔵する。

三椏耕種基準

（みつまた）

Ⅰ　育苗

1　静岡系の場合　－　実生育苗　－

（1）　種子

６月中旬、果実の黄熟直前に採種し、湿度を保持して貯蔵する。

（2）　苗床整地

浅く耕耘し均平にならす。播巾75㎝、通路巾50㎝内外の平畦苗床に仕上げる。本圃１アール当たり３～４㎡を必要とする。

（3）　播種

播種期は３月下旬～４月下旬とする。

本圃アール当たり1600粒を散播する。実験用には、株間５㎝×６㎝の８粒点播とする。

播種に当たっては床面が白乾せぬよう潅水しながら作業を進める。

覆土は、通路の上を取って厚めにかける。

（4）　管理

（ア）被覆

床面は、籾殻、切藁などを敷き込み、さらに50㎝の高さに寒冷紗または菰で日覆いをする。日覆いは９月に除去する。

（イ）間引き

発芽後、点播したものは２本立てに間引き、苗が５㎝に達したとき１本立てとする。

（ウ）追肥

苗が５㎝のとき、㎡当たりＮ成分で４～５ｇの化学肥料を施用する。

（エ）その他

除草、潅水は適宜行う。

2　掻股（かぎまた）系の場合　－　埋幹育苗　－

（1）　穂木調製

３月上旬、１～２年生の幹を切取り、長さ14㎝に切断して穂木とする。

（2）　整地

５～６㎝の深さに耕起し、均平にならして、床面巾60㎝、通路巾40～50㎝の平畦苗床に仕上げる。本圃１アール当たり５㎡を準備する。

（3）　埋幹

３月上旬、床面に、深さ３㎝、間隔９㎝の横溝を切りながら、溝の底に穂木を２列に埋め込んでいく。埋幹後は十分潅水し、通路の土でよく覆土する。

（4）　管理

間引きを行はぬ他は、実生育苗に準ずる。

Ⅱ　本圃

非耕地に栽培するときは整地せず、60㎝×60㎝に植え穴を掘り１株に２～３本ずつ植え付ければよい。

以下は、専門畑栽培（専用畑といえどもヤマハンノキ、ウルシ、キリなど混植）について述べる。

１　苗準備

落葉後の初冬に苗を掘取り、20～30本のゆるめの小束にして仮植する。実験用には幹の長さ、幹の直径、苗の重さを揃えて分別する。

２　整地

できるだけ深く耕耘し均平にした後、条間60㎝に深く作条する。

作条内に基肥（アール当たり各成分量は　N…0.75kg　P…0.56kg　K…0.56kg）を施用し間土を軽くかぶせる。

３　定植

仮植中の苗の新芽が少し開きかけ「つばくろぐち」になったとき（３月中旬～４月上旬)、株間50～60㎝、一株２～３本ずつ深植えにならぬよう植え付けて、株際を軽く踏圧する。

株際には、枯草などを置いて乾燥を防ぐ。

４　管理

（１）　中耕・除草

初年目は６～７月、２年目は４～５月に深く行い、更に７～８月に浅く耕す。３年目は除草のみを実施する。

４年目以後は、３年目に準じてこれを繰り返し、刈り取り量が多く中耕が可能になった場合は３月に実施する。

（２）　追肥

毎年３月下旬、三要素をアール当たり各0.4kgあて施用する。

５　収穫

３年目から開始して１年隔きに収穫する。

２月～３月中旬に、１m以上に伸びたものを選んで、根元から１～３㎝の処を、鋭利な鎌で刈り取り、刈株の先端は反対側に切り返しておくのがよい。

６　剥皮

刈り取った収穫物は、蒸箱に入れて蒸熱し、靱皮を左右に剥ぎ取る。

剥ぎ取った生皮は、根元をたばねて架干し、水分13%以下の黒皮に仕上げる。黒皮は15kgか30kgの大束にして出荷する。

楮耕種基準

（こうぞ）

Ⅰ　育苗（分根法）

１　整地

深く耕耘、砕土、均平にし、床巾80㎝、通路巾が40㎝の平畦苗床とする。

（本圃１アール当たり苗床約７㎡必要）

２　挿木

３月下旬、強壮な株を掘り起こし、直径６～８㎜くらいの１年生根を採取する。これを長さ12～13㎝に切って苗床に挿す。

株間は10㎝×15㎝とする。上端を1.5㎝程度地上に残して、少し斜めに挿木し、１列毎に軽く鎮圧しては次の列を挿す。

挿木の後、十分潅水し、未熟堆肥、籾殻、切り藁などで被覆する。

３　管理

発芽を初めたら被覆物を除去する。

６月上旬～中旬、発芽完了したら強勢な芽２本を残して摘芽し、さらに30㎝に伸長したとき摘芽して１本立てにする。

第１回摘芽後１㎡当たり硫安20ｇを施用する。

晩秋落葉するまでの間、適宜除草する。

Ⅱ　本圃

非耕地に栽培する場合は整地することなく、60×60㎝に植え穴を掘り植え付ければよい。

以下は専用畑栽培について述べる。

１　苗準備

初冬、落葉が終わったら、苗床から掘りあげて仮植し、藁などで防寒被覆をしておく。

本圃定植の直前に掘りあげて、根部を20㎝、枝条を15㎝の長さに切断する。

２　整地

できるだけ深く耕耘し、均平にならす。条間60㎝に深く作条する。

３　定植

１月～４月上旬、株間50～60㎝に深植えにならぬよう、垂直に植えつけて、株際を軽く踏圧する。株際には枯草などを置いて乾燥を防ぐ。

４　施肥量（アール当たり）

３～４月、芽肥としてＮ成分で0.7kgを施用する。

７月下旬には追肥として、ＮとＰは成分で各0.75kg、Ｋも成分で0.56kgを施用する。

５　管理

（１）　中耕

初年目…５月中旬～７月上旬に適宜実施。

２年目以降…４月中～下旬に適宜実施。

（２）　除草

８月中旬に草刈りを行って株際に敷草する。

（３）　摘芽

毎年６月に実施する。

本圃初年目…一株１本立て

２年目…一株２～３本立て

３年目…一株５～６本立て

４年目以降…一株10～12本

６　収穫

12月～２月の間に、鋭利な鎌で刈り取る。

初年目は地上３㎝の位置で刈り取り、２年目以後はなるべく低く刈り取る。

その際切り口が南に向かって滑らかになるよう心がける。生育不良の枝条といえども残らず刈り取る。

７　剥皮

120㎝内外に切断した枝条を、蒸箱に入れて蒸熱し、白い木質部が３㎝位現れる頃を見計らって取り出し、靱皮を左右に剥ぎ取る。

剥ぎ取った生皮は、根本をたばねて架干し、水分13%以下の黒皮に仕上げる。黒皮は15kgの大束にして出荷する。

杞柳耕種基準

（こりやなぎ）

１　穂木の準備

12月～２月の間に４～５年生の株から穂木を刈り取り、長さ25～30㎝に切り揃える。梢の細い部分は用いない。（実験用には茎径、重量を揃える）

２　整地

穂木の準備が終わり次第、可能な限り深く耕起し、５～６ｍ間隔に潅排水溝を設け、均平にする。

３　挿し木

条間60㎝、株間20㎝とし、少し斜めに穂木の３分の２を挿し込み、株際を軽く踏圧する。

４　施肥量（ａ／kg）

初年目…硫安3.0　過石1.5　４月中旬（新芽の長さ５㎝程度）

２年目以降…硫安3.0　過石　1.5　３月中下旬（発芽期）

良質生産を最大目標とするときは、減量する。

５　管理

（１）　中耕・除草

初年目は発芽後深く中耕し、以後は除草をかねて５月中下旬と11月下旬に実施する。

（２）　潅水

過乾条件が持続するときは潅水する。

（３）　摘芽

枝条の分枝を防ぐため、枝条から出る芽は長さが３㎝を超えぬうちに徹底的に摘み取る。芽を横向けに掻き取るのがよい。

６　収穫

12月～１月、枝条の根元１～２㎝を残して鋭利な鎌で刈り取る。

刈り取った青芽（皮柳）は、長短に大別して、水稲跡地に３㎝位の深さに挿して発芽発根を待つ。（直径20㎝くらいの束を堀立ててもよい）

枝条の下部から発根し、地上部でも芽が２～３㎝に伸びたら、抜き取って皮を剥ぎ取り、濡れ筵にくるんで良く揉み、直ちに清水で十分洗浄する。

洗浄後は、桶、樽などの中に立てて、175㎝、165㎝、135㎝、80㎝以上を基準に選別し、晴天３日以上陽干して白芽（白柳）に仕上げる。

３～４年生後にあっては、７月～８月にも枝条の良く繁茂したところを収穫し、１昼夜水に浸漬して剥皮、陽干する。